

はじめに

本日はガイダンスにお越しいただき、ありがとうございます。

このパンフレットは、
美学芸術学研究室の様々な魅力を
駒場のみなさんにご紹介するために作成しました。
これを読んで「絶対に美芸へ進学するんだ……！」
とまではならないかもしれませんが、
少しでも当研究室の面白さや、
美学・芸術学の学問の面白さが伝われば幸いです。

■ ■ 美学芸術学とはなにか？ ■ ■

◆ 美学芸術学 小史

美学芸術学は、18世紀のドイツの哲学者バウムガルテンがそれ以前の理性主体の学問に対し、感性主体の学問を立ち上げようと『美学(Aesthetica)』という本を著したことに端を発する学問です。その後、カントが更なる批判的な理論構築を行っています。このため、美学においてカントは避けて通れない存在です。

一方で、芸術に関しては美学の成立以前から盛んに論じられています。古典古代においてプラトンが一連の詩作(芸術)に関する批判的考察を行ったのに始まり、アリストテレスがその論に反駁し、後世の議論の基礎をつくりました。続く古典古代後期の新プラトン学派では、プラトンの芸術論が発展的に語られ、中世のスコラ神学における議論に影響を与えました。その後、ルネサンスにおいて芸術一般の擁護の機運が高まり、近代における古典古代文芸の本格的再興に結びつきます。近代ではシラー、ヘーゲル、ニーチェ、ハイデガーの議論が有名です。そして20世紀になると、芸術論は多様化の一途をたどり、現代へ至ります。

◆ 今日の意義

CM・テレビドラマ・文化遺産・環境・アイドル・ゲーム……どれも、現代においてこそ論じることができ、なおかつ論じる必要性もある美学・芸術学上のテーマです。

例えば、著作権なども議論の対象になります。著作権は「ある作品に対して、作者以外の人間が勝手に手を加えてはいけない」という趣旨の法律(=著作権法)によって守られている権利です。

しかし、ここで前提とされている「作品」や「作者」という概念は200年程度の歴史しか持っていないません。18世紀後半ごろまでは、絵や音楽の作り手は、注文主に振り回され、制作物の内容にまで干渉されることが決して珍しくなかったのです。その後、「天才」である「作者」が、他人が手を加えることができないような「自律的」な「作品」を「創造」という認識が主流となる時代になりました。

この認識は現代でもかなり根強いのですが、現代では、「作者」概念などが生まれた当時とは、芸術のあり方そのものがかなり変わってきています。複製技術が発達したことにより、「唯一の、オリジナル」な「作品」よりも複製品のほうが多く出回る事態が常態化しました。また、一瞬だけの作品であるパフォーマンス・アートもよくみられます。ラップ・ミュージックは他の既存の曲などからのサンプリングがかなり重要な要素となっています。

このような作品群に対して、近代的な概念を多く含む著作権を適用するのは果たして適切な態度なのでしょうか？しかし、著作権の在り方について説得力ある主張をするためには、「作者」や「作品」の概念について掘り下げ、現代においてそれらがどう変容してきたのか、あるいはその現状についてよく認識するように努める必要があります。

著作権に限らず、現代においては美や芸術に関する概念はかなり変容していて、それらについて美学・芸術学的アプローチを用いて思索することは今日的な意義を十分に持った行為であるといえます。音楽とはどうあるべきか。何が美で何がそうではないといえるのか。そうした問いに答えていくためには、プラトンやアリストテレス、あるいはカント、ヘーゲル、ニーチェなど先人の哲学者たちの美あるいは芸術についての論考を参考にしつつ考察を深めます。これが美学的アプローチだといえます。これらの古典は今日の視点からみれば不十分で批判すべき点もありますが、各時代を代表する思想家の論考は現代においても十分な強度を持っており、おおいに参考となります。

■■研究室概要■■

◆ 歴史

明治 26(1893)年： 東京帝国大学の文科大学(文学部の前身)に美学の講座が設立される

明治 43(1910)年： 哲学科の下に美学専修学科ができる

大正 6(1917)年： 美学が美学美術史に改編される

昭和 21(1946)年： 美学史学と美学に分離・独立

昭和 24(1949)年： 再び美学美術史として統合

昭和 25(1950)年： 美学美術史から美学美術史学へ名称変更

昭和 38(1963)年： 再び美術史学と美学が分離

昭和 42(1967)年： 美学が美学芸術科に改編

昭和 43(1968)年： 美術史学が第一類(文化学)から第二類(史学)に移動

平成 7(1995)年： 第一類が思想文化学科に改称

平成 28(2016)年： 1学科制の導入により、人文学科所属に変更

◆ 教員紹介

小田部胤久 教授:

日本・西洋の美学思想担当。非常に厳格かつ本格的な原典研究を行います。

三浦俊彦 教授:

分析哲学・論理学担当。科学的な美学理論を中心に幅広く研究されています。

吉田寛 准教授:

感性学・デジタルゲーム研究担当。西洋音楽研究もされています。

◆ 研究室構成(2023年度)

教授×2、准教授×1、助教×1、教務補佐×5、研究員×3、大学院生×32、事務補佐×1、学部生×81(4年以上×14、4年生×29、3年生×38)

◆ 雰囲気

教員同士の仲の良さは、宴席だと一目瞭然です。演習や卒論指導では愛のムチをふるわれることもあります。コロナ前は年に数回開催される学生主催のコンパや研究室旅行などには教授も参加され、近い距離感でお話することができます。

学生同士の仲はよく、学問においても日々、切磋琢磨しています。また、面倒見のよい先輩が多く、院生と学部生が二人一組で発表する時などには、先輩の知られざる底力が判明することもあります。

自由な雰囲気と、真摯に学問に取り組む姿勢の絶妙なバランスが築かれています。

◆ 研究室出身の学者・著名人等

谷川渥(大学教授。シュルレアリスム研究など)

根岸一美(大学教授。ブルックナー研究など)

ナム・ジュン・パイク(ビデオ・アーティスト)

中島貞夫(映画監督)

井坂聡(映画監督)

濱口竜介(映画監督)

倉本聡(脚本家)

小林恭二(作家)

渡辺裕(音楽学者。聴覚文化論など)

キタニタツヤ(ミュージシャン・作曲家・編曲家)

■■講義紹介■■

◆ 演習(ゼミ形式・必修)

現3年生の演習では、毎週テキストが指定され、決められた発表者が中心となって授業を進めていく形式をとっています。教官・院生が指揮をとりつつ、課題となったテキストについて学生同士で議論します。テキストについての質疑応答や、意見が分かれる部分について議論します。扱うテキストは美学・芸術学関連のものが中心で、それらに関する見識を深めるだけでなく、テキストを読んで理解し議論をする力を深めていきます。これらのテキストの中には現代の問題に深くかかわる先人たちの思想が盛り込まれており、現代の事象を美学的視点でとらえる訓練になります。

◆ 原典講読(ゼミ形式・必修)

基本的には外国語文献(英語・ドイツ語・フランス語)を講読する授業です。学期ごとに3~4講座開講され、毎学期1コマ以上履修することが推奨されています。駒場で履修した第二外国語のみにとどまらず、すべての授業が履修可能です。ひとつの文章をじっくりと精読する授業もあれば、数多くの文章を手際よく読むことが求められる授業もあります。授業によっては、テキストに関連した日本語論文を参照する場合があります。

この授業には、進学が内定した2年生から院生まで幅広い学年が参加します。授業中に院生の方々の鋭い議論が聞けるのも魅力です。

◆ その他選択科目(美学芸術学概論・美学芸術学特殊講義など)

基本的に、文学部の授業は前期教養における総合科目のA系列に近いです。

美学芸術学概論や美学芸術学特殊講義は最低取得単位数が定められていますが、他の学部・学科の授業も基本的には自由に履修することができます。ゼミ形式の授業も多くあり、先生がたもご自身の専門分野を中心に講義をされるので、興味に応じて好きなだけ学びを深められるのが本郷キャンパスの良さであると言えるでしょう。

■■ 卒業生の進路 ■■

◆ 就職

美学芸術学は、毎年、就職志望の多くの学生が希望の職種に就職しています。近年の就職先のうち、特にメディア関連(出版・テレビ・IT など)企業は学科で学んだことを直接活かしやすいところだと言えます。また、他の業界でも、学科で学んだ分析・探究の方法・姿勢は仕事において役立つと思います。

近年の就職先 一覧

NHK・電通・博報堂・朝日新聞社・中国新聞社・講談社
新国立劇場運営財団・和田画廊・音楽座(Rカンパニー)・NHK エンタープライズ・大映テレビ株式会社・葵プロモーション・吉本興業株式会社
富士通株式会社(システムエンジニア)・シスコシステムズ・NTT コミュニケーションズ・日本コンピュータ株式会社・株式会社サイバーコミュニケーションズ・チームラボ株式会社@本郷・面白法人カヤック
みずほ銀行・野村證券・アクセンチュア・富士火災海上保険・東京保険医協会・大和証券ビジネスセンター
JRA・JFE スチール・東芝・中日本高速道路株式会社・丸紅
文部科学省・東京都庁

◆ 大学院進学

例年東大大学院へ3~4人程度です。美学芸術学研究室に残る人も多いですが、駒場の総合文化研究科や、大学院にしかない本郷の文化資源学専攻などに進む人もいます。

また、東京芸術大学など、他の大学院に進学する人も若干名います。

■■ 卒業論文 ■■

卒業論文は書くことが義務付けられており、字数は 40000 字程度です。

2022 年度の卒業論文のタイトルは以下の通りです。

- 『スター・ウォーズ』『シークエル・トリロジー』の特色について
- 少女小説の中の「お嬢様学園」——今野緒雪『マリア様がみてる』を題材に
- 「写ルンです」はなぜ今若者に人気なのか
- インターネットと「音分裂症」～ニューエイジ・リバイバルは如何にして起こったのか～
- スマートフォンのユーザーインターフェースにおける機能美
- 都市の風景のアイステーション ——ゲルノート・ベーメの一般知覚理論を手がかりに
- 新たなアイドルとして受容される Vtuber の分析
- ZOC/METAMUSE と彼女たちを愛する「女の子」について ——女性アイドルと女性ファンの在り方とは何か——
- チームの創造性 ——即興性に着目した考察——
- 多様性と日常性を軸とした都市空間における場所性の再検討
- 〈内臓嗜好症〉にみる倒錯的偏愛と倒錯する自己
- ゲームは死をどのように表現してきたか
- 少女小説の中の「お嬢様学園」——今野緒雪『マリア様がみてる』を題材に
- 黒の衝撃はなぜ起こったか ——服飾における色彩と形を通じて
- 戯曲『ビニールの城』における人形の役割について
- G. W. F. ヘーゲル『精神現象学』における個別性と普遍性 知の生成に即して
- マーライオン像のアート作品を通じた再検討
- 北原白秋の詩歌における印象派受容
- スマホ全盛の現代におけるデジタルカメラのあり方
- 「IPPON グランプリ」に見る、大喜利の笑いの特殊性
- 小説版『日の名残り』: 虚構の語りをもたらす主体構築の可能性について
- 「偶然短歌」の享受のあり方の検討
- 濱口竜介とエリック・ロメールの結節点
- 見田宗介『近代日本の心情の歴史』の現代への適応可能性: その理論と実践
- ストーリー生成ゲームの可能性
- 『エレファント』における遅さ
- 『崇高と美の観念の起源』における政治経済学

「美学的なアプローチがなされていれば対象は不問」であり、テーマ設定の自由度はかなり高いです。卒論のタイトルからも、美学・芸術学科の学問領域の広さが分かります。

なお、他の年次の卒論のタイトル一覧は学科のサイトから見ることができます。

(<http://www.lutokyo.ac.jp/bigaku/thesis.html>)

■ ■ 年間スケジュール ■ ■

- | | |
|-----|------------------|
| 4月 | 新3年生歓迎コンパ |
| 6月 | 学科旅行（1泊2日） |
| 7月 | （科目によっては繰り上げテスト） |
| 8月 | 夏休み |
| 9月 | 冬学期開始・内定者歓迎コンパ |
| 11月 | ホームカミングデー |
| 12月 | 集中講義 |
| 1月 | 卒論提出・入院試験 |
| 3月 | 卒業生追い出しコンパ |

6月には、3年生から院生、そして教授全員で1泊2日の学科旅行に出かけます。2017年の行き先は那須でした。この旅行での飲み会は、お酒の力を借りつつ、教授や院生と一気に仲良くなるチャンスです。



■ ■ 時間割サンプル ■ ■

ここでは学科学生の時間割を紹介します。文学部生も駒場で開講される後期教養学部の授業を履修することができますが、キャンパス間の移動に1時間程度要します。2・3限間でキャンパス移動は不可能ではありませんが、慌ただしい移動になるでしょう。

表中の赤いコマは、美学芸術学専修の授業にあたります。

Case 1: 卒業後は大学院進学予定

3年 夏学期

	月	火	水	木	金
1					
2	文化資源学 特殊講義 日本演劇 (ベルグマン・アンネ)	国文学演習 明治・大正文学 (河野龍也)	表象文化論 特殊研究演習 詩 (野村喜和男)		美学芸術学演習 (三浦俊彦)
3	芸術学概論 (三浦俊彦)	美学芸術学特殊講義 いきの構造 (橋本崇)	日本手話 (小林信恵)	原典講読 音楽学の英語文献 (松原薫)	
4		美術史学特殊講義 日本絵巻史 (高岸輝)			
5			芸術作品分析法 総合芸術としての オペラ座 (三浦篤)	博物館概論 (新藤浩伸)	

3年 冬学期

	月	火	水	木	金
1					
2	美術史学特殊講義 日本古代絵画史 (増記隆介)	国文学演習 文学論争 (河野龍也)		国文学特殊講義 古事記 (松本直樹)	美学芸術学演習 (小田部胤久)
3	原典講読 フィクションと道徳 (三浦俊彦)		現代文芸論概説 メタファーと翻訳 (阿部賢一)		
4		英語学英米文学 特殊講義 アダプテーション (新井潤美)	バリアフリー総論 (熊谷晋一郎)		
5					

※集中で美学芸術学特殊講義(石田美紀)をとりました。

【本人のコメント】

各セメスター10コマ前後履修している方が多いと思います。サークルでAセメが忙しくなることがわかっていたので、そちらの授業は少なめにしました。講義内容に関しては、美学で必要な単位をとりつつ、迷っていた表象文化論や国文専修の授業も取りました。授業の自由度がとても高く、関心のバラついている人間にはありがたかったです。

Case 2: 卒業後は就職、合唱サークル所属

2年 冬学期

	月	火	水	木	金
1					都市計画概論 (工学部) (小泉秀樹)
2	哲学概論Ⅱ 哲学の基礎 (納富信留)				
3		美学概論 美的生活論 (小田部胤久)	映画論(前期) 映画を読むこと、語る こと (韓 燕麗)	表象文化論実習 Ⅱ オムニバス (各教員)	
4	表象文化論特殊研究演習 Ⅲ(教養学部) 分析美学とビデオゲーム (松永伸司)	都市建築史概論 (工学部) (海野聡、加藤耕 一)			美学芸術学特殊 講義Ⅲ 歴史の語り方— 建築、デザイン (天内 大樹)
5			美術論(前期) イメージへの愛、イメ ージへの憎しみ (森元 庸介)		

【本人のコメント】

理科一類から進学したので、哲学・美学の講義のほかに都市や建築についての講義を受けていました。全てオンラインだったためさまざまな学部の講義を取っていましたが、現在でも本郷の講義なら取りやすい他、特定の曜日を駒場の日にするなどして教養学部の講義を取ることできると思います。

3年 夏学期

	月	火	水	木	金
2				美学芸術学特殊講 義Ⅰ 写真論 (橋本一径)	美学芸術学演 習Ⅰ 美の進化 (三浦俊彦)
3	芸術学概論 (三浦俊彦)	社会心理学概論Ⅰ (村本 由紀子)	文化資源学特殊 講義 文化経営学入門 (鄭 仁善)		原典講読Ⅸ メディア感性学 (吉田 寛)
4		言語文化論特殊研究Ⅰ (養) (池田雄一)	西洋哲学史概説 第2部Ⅰ (乗立 雄輝)		

3年 冬学期

	月	火	水	木	金
2					美学芸術学演習 芸術の制度定議論 (三浦俊彦)
3	社会教育論 (育・A1のみ) (李 正連)		情報メディア論Ⅱ (西川 賀樹)	ダイバーシティ と社会 (育) (飯野 由里子)	美学芸術学特殊講 義Ⅳ デジタルゲームの 感性学 (吉田 寛)
4	社会教育論 (育・A1のみ) (李 正連)	表象文化基礎論(養) 暴力論再考 (竹峰 義和)	表象メディア論演 習(養) 異界について (一條 麻美子)		原典講読Ⅷ ものの理論 (天内 大樹)
5	応用倫理特殊講義 都市の環境倫理 (吉永 明弘)	文化空間論 (養) (荒又 美陽)			

【本人のコメント②】

サークルの活動に力を入れていたので、曜限をみて講義を決めていました。また、3Sには集中講義で美学芸術学特殊講義(太田峰夫)を取っていて、3Aの火曜日は駒場に通っていましたが。必修の数がそれほど多くないため、周りの人とは違った時間割になることがとても多いと思います。

4S以降は1~5コマ程度に抑えている人が多い印象ですが、美学は毎年講義内容が変わっていくものが多いので、自分の関心に近い講義は積極的に覗いてみるのが良いと思います。

■ ■ 関連する他学科・学部との比較 ■ ■

東京大学には現在、

- ・文学部人文学科 美学芸術学
- ・文学部人文学科 美術史学
- ・教養学部教養学科超域文化科学分科 表象文化論コース

などの関連した学科があります。

進学する学生にとっては、「美学と美術史はなにが違うのか」「演劇を研究したいが美学と表象どちらに進むべきか」などの疑問があると思います。

ここでは、各学科の違いについて、各学科の学科紹介文を引用しながら説明します。

◆ 美学芸術学専修課程

美学は、本来は美や芸術に関わる原理的探求を行う哲学的学問であるが、学問の性質からして、芸術諸ジャンルの具体的なあり方と切り離された抽象的な議論に終始するわけにはいかない。とりわけ近年においては、美や芸術といった概念そのものが、歴史的・社会的に形成され、変容しているものであり、それ自体のうちに西洋近代のイデオロギーを色濃く刻み込んでいるものであるというような見方が出てくるようになり、その成立をめぐる政治的・社会的な状況や、芸術の「現場」におけるその機能の仕方といった問題を具体的なレベルでフォローしてゆくことが強く求められるようになってきている。当研究室では、1971年に美学講座を「美学芸術学」に改組することによって、諸ジャンルの個別的研究にかかわる諸芸術学を包含する形での展開をはかるなど、そういう方向への拡大的な展開をはかってきた。最近の卒業論文のタイトルをみても、ゴジラ映画、『ゲゲゲの鬼太郎』、刺青の歴史等々、狭義の美学の枠に収まりきれない、多様な領域にわたる研究が展開されていることがわかる。

しかし他方で、当研究室の特徴が、そのような「何でもあり」的な個別研究の寄せ集めの世界とはかなり違うところにあることもまた確かである。単に個別的なジャンル史の研究や地域文化の研究であることをこえて、それらの現象を(狭義の「美」や「芸術」には還元できないにせよ)美や芸術に関わる文化という大きな枠組みの中においてみてみることによって、個別研究だけからではなかなかみえてこないような問題系が開かれてくる。音楽や文芸や、はたまた漫画や自然美にいたるまで、これだけ専門の異なる人間が集まっていながら、コミュニケーションが成立し、むしろ畑違いの人間同士でディスカッションをすることで視野の広がりを得られるという関係が成り立つのも、当研究室ならではのことである。また、当研究室の教育においては、伝統的に、とりわけ「古典」とされるような文献の厳密な読解が重視されてきた。

ともすると表層的なことがらだけを見て物事を考えてしまいがちな今の状況の中で、あえてこのような世界に身をおいてみることによって、自分自身が知らぬうちに囚われていた固定観念から自由になることができたり、表層的な問題の奥底にあるものがみえてきて、かえって斬新な視点が得られるという体験をすることも少なくない。文化が多様化し、不透明になっている時代である今こそ、原理に立ちかえって物事を考えようとする学問が求められているとも言えるのではないだろうか。

(<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/laboratory/database/6.html>)

◆美術史学専修課程

(前略)

美術史学はまず美や芸術について考える学問の中に生まれ、しかししだいに美学とは異なる領域を形成し、歴史学の一分野を志向するようになった。美術史学の主要な課題は、現に存在する作品を調査分析して、美術の歴史的展開を具体的に明らかにすることであり、考古学に近い研究態度を有する。もちろん文献史料をもとに遺品のない時代や作者の伝記、美術をめぐる制度や流通などについて考察もするが、その場合でも求められる実証性が、この学問をイメージの歴史学へと向かわせた。根拠のない評論めいた独白はここでは歓迎されない。とはいっても、ある程度具体的実証的でありさえすればあとはかなりの自由を研究者に認める鷹揚さも美術史学にはあり、それが研究室の闊達な雰囲気結びついている。

東京大学で美術史を学んだ研究者たちは、西洋・東洋・日本の古代から近代まで、絵画・彫刻・工芸のほとんどあらゆる分野で、日本における美術史学の発展に主導的な役割を果たし、国際的に高い評価も得てきた。活躍の場は大学・研究所・博物館・美術館・官庁・ジャーナリズムと多岐に亘る。

現在の専任は、日本中世美術、日本近世美術、西欧中近世美術をそれぞれ専門とする教員3名だが、学内学外の美術史学出身の教員の協力を仰ぎ、幅広い指導ができる。もっとも卒論を含めて学位論文のテーマは、教員の専門と無関係に学生が自由に選択し、きわめて多彩である。進学した3年生は、通常5月に行なわれる関西見学旅行の演習に参加して、実物を楽しみ、よく観察し、それについて調べ考えるという美術史学の基本に触れるが、日常の授業でも博物館・美術館・美術商の見学や、スライド・写真の多用によって、眼の記憶と判断力を豊かにすることが配慮されている。学部卒業で就職する学生は、出版・放送など特に美術史とは関係のない職を得るのが普通である(まれに美術館学芸員になる人もいる)。専門家を目指す人は

大学院に進学し、修士課程を修了した時点で、あるいは博士課程在籍中に、全国各地の美術館・博物館に学芸員として就職する例が多い(大学に職を得る人もいる)。

美術史学は大学の中でのみ生きている学問ではなく、社会と密接な関わりを持つ。それゆえ教員は、国・地方公共団体・私立の美術館・博物館の運営評議員や作品購入に関する委員となったり、一般の観客に向けた講演を行なうことも多い。国宝・重要文化財の指定・保存に関する審議会の委員や、老舗の東洋美術史研究誌『国華』の編集委員も歴代の教授が務めている。大学院生は美術館などでアルバイトをするほか、近年は授業の一環として美術館の特別展のカタログ制作を手伝うこともあった。

(<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/laboratory/database/12.html>)

◆表象文化論コース

本コースは、科学技術の発達、情報メディアの巨大化、知の細分化、文化接触の多様化など、文化環境の急激な変化のなかで、文化を〈芸術表象〉の局面において捉え、その〈創造〉〈伝達〉〈受容〉の多面的・相関的な仕組みを分析し、諸文化の歴史的特性と構造的特質を解明しようとする。そのために、単に西洋型の芸術や芸術に関する思考をモデルとするのではなく、日本をはじめ地球的な規模で多様かつ多形的に現れている芸術の表象を対象とし、現代の知を集約し、かつそれを越え得るような、真に国際的な視座と実践的な方法の探究が行われている。

カリキュラムとしては、問題をより包括的な形で扱う「表象文化基礎論」「表象システム論」「表象メディア論」「表象文化史」と、より個別的なフィールドに即した研究である「舞台芸術論」「造形空間芸術論」「音響芸術論」「映像芸術論」「言語芸術論」などの講義・演習があり、電子メディア機器等を用いた実習も行っている。

このように芸術表象を通じての〈文化の分析学〉を実践することによって、本分科は、国際的な視野をもち、芸術表象についての専門的知見と複数言語による表現能力をそなえた研究者ならびに高度の専門家の養成を目指している。表象文化論コースは1987年に教養学科第一に所属する分科として発足し、それ以来24年すでに多くの卒業生を社会の多方面に送り出している。その進路は基幹情報産業、新聞社、広告代理店、美術館、銀行、メーカーと多種多様であり、アート・マネジメントなど今日的分野での活躍も期待される。大学院としては総合文化研究科超域文化科学専攻に表象文化論コースがあり、従来の美学や美術史学とは方法論を異にする斬新なアプローチによる芸術研究が行われている。その成果の第1期の総括として『講座

表象のディスクール』(東大出版会、全6巻)が刊行されている。また、2006年度には表象文化論学会が設立され、年次大会や各種発表の場でも多くの成果が世に問われている。

(<https://www.c.u-tokyo.ac.jp/info/academics/fas/dhss/ics/hyosho/>)



■■よくある(?)質問集■■

Q1:おしゃれですか？

A1:おしゃれな人はいます。独特のセンスを持つ人もいます。普通の人もあります。

Q2:小田部先生が語学魔人というのは本当ですか？

A2:本当です。ドイツ人でもないのになぜか独羅辞典を編纂している他、フランス語の原典講読を担当したり、ギリシャ語・ラテン語の文章を授業プリントで配布することもあります。プリントに掲載した文章の構文も解説していただけます。たまにイタリア語の本からすらすら引用される(もちろん英語も)など、とんでもないエピソードが山盛りです。まだ他の言語を隠している可能性もあります。日本語も通じます。主食はお菓子との噂もあります。

Q3:三浦先生ってどんな先生？

A3:三浦先生は、明朗な話し方が特徴で、論理学や分析的な美学を中心に講義をされています。アイドル文化やウルトラマンに関する知識が深いことや、サプリメントをこよなく愛する健康オタクとして雑誌に連載をした経歴をお持ちであること、ミミズとともに生活したご経験もあるとのことから、学問的守備範囲がとてつもなく広いことが伺えます。

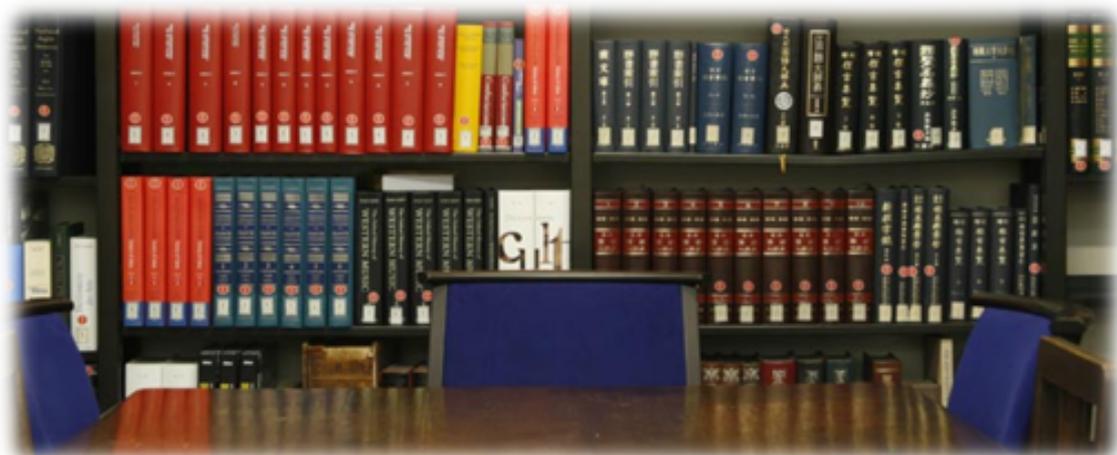
Q4:研究室の設備について教えてください。

A4:授業関連であれば学部生でも自由に使える高性能コピー機があります。両面コピーや複数枚まとめてのコピーは朝飯前、ファックスにまでつながるハイテク・マシンですが、そこまで使いこなしている人は果たしているのでしょうか。もちろん、研究室所蔵の雑誌類・本も盛りだくさんです(借りる際は院生以上の研究室の人に声をかけてください)。その他、秘蔵の写真、携帯用の食器など、よくわからないながらもわくわくするものが一杯置いてあります。ロマンと歴史と書物とコーヒーの香りがただよう研究室です。

Q5:研究室の略称は？

A5:「美学芸術学」では少し長いですね。学部生は「美芸」または「美学」と略します。ちなみに教授陣は「美芸」という略称を使わないようです。

※研究室には、ここには書けない秘密もたくさんあります。進学後、自らの眼で確かめてみましょう。



■ ■ 美学芸術学に関する主な著作 ■ ■

■ 今道友信『美について』講談社現代新書、1973年

著者は、現在の美学の先生方が学生だった頃に先生だった方です。ラテン語で授業をしたこともあるそうです。ラテン語で著した幻の著書もあり、邦訳が出版されていなくてなかなか不便、という意見も。しかし、この本はカバーの裏に美学年表が入っていて、結構良心的なつくりになっています。

■ 西村清和『現代アートの哲学』産業図書、1995年

現代アートは「意味不明なもの」の代名詞のように思われがちです。加えて、何の指針もないカオスあるいは、芸術ではないものとして蔑まれている傾向もあります。しかし、美学の徒たるもの、それで済ませるわけにはいきません。この本は現代アートが提示する問題、またそれを取り巻く問題をわかりやすくまとめています。

■ 渡辺裕『聴衆の誕生』(増補版)春秋社、1996年

センター試験にも出題された名著。近代的聴衆の誕生から、複製技術の発達や商業主義の台頭などを経て「軽やかな聴衆」が誕生するというポストモダンの音楽文化のありようを渡辺節全開で描き出す。とても読みやすい本なので、音楽美学に興味のある人(もない人も)必読。



■ 小田部胤久『芸術の逆説』東京大学出版会、2001年

いきなり読むには難解な本なので、とりあえず購入して机に飾って目標にするのが当面の正しい使い方になってしまいそうです。ちなみに、きちんと理解すると近代的芸術観(私たちはまだその内部にとどまっているらしいです)の意義が明らかになるそうです。

■ 三浦俊彦『ラッセルのパラドクス—世界を読み換える哲学』岩波新書 新赤版(975)、2005年

20世紀分析哲学の出発点を示したと言われるラッセルの哲学の入門書として最適な一冊。小説も書かれている三浦先生は一般向けの著書も多く、他にも『心理パラドクス—錯覚から論理を学ぶ 101 問』(二見書房、2004年)なども知的好奇心をくすぐる本です。



■ 竹内敏雄編『美学辞典 増補版』弘文堂、1974年

美学のバイブル的存在。しかし、現在は(学術書にはお約束の)絶版で、新品の入手は困難です。

■ 佐々木健一『美学辞典』東京大学出版会、1995年

辞典という書名ですが、実際は読み物という感触の本です。25の概念に絞って論じられています。各概念が定義・歴史・考察の三方向から解説されており、薄くてよくまとまっていると評判の本です。



■ プラトン『パイドロス』『パイドン』『饗宴』など

基本的には、どの本もソクラテスおじさんが若者に議論を吹っかけて最終的には勝つという内容なのですが、美についての書物のうちの古典中の古典です。古今東西の美学者が必ず通過してきたといっても過言ではない本です。訳は複数ありますが、岩波文庫版が入手しやすいようです。また、大抵の図書館には岩波書店のプラトン全集が置いてあるはずですよ。

■ 石井洋二郎『美の思索—生きられた時空への旅』新書館、2004年

文体はきわめて詩的で、こんな風にレポートを書いたら怒られそうな感じです。しかし、自分が美しいものに接して味わった感動を白けさせてしまうことなしに学問的に扱う可能性を教えてください。美学を学んだことで美しいものに感動できなくなった、というのではなんだか本末転倒ですからね。石井先生のように心豊かに思索したいものです。

■ 山田忠彰『エスト-エティカ 〈デザイン・ワールド〉と〈存在の美学〉』ナカニシヤ出版、2009年

少し美学の枠からはみ出る内容の本を紹介します。内容をかいつまむと、「倫理的な唯美主義」である「ネオ・エステティズモ」という概念を、過去の各種哲学者の理論を援用しながら提唱する本なのですが、美学の学際的な性格をよく反映した本で、とても面白いです。著者の山田先生は『デザインのオントロジー』と『スタイルの詩学』という2冊の本を小田部先生と共同で編集していることも特筆すべきでしょう。

- 酒井紀幸・山本恵子編『新版美/学』大学教育出版、2009年
第一部は美学史について、第二部は現代アートや音楽、映画について、広く浅くまとめられている本です。基本的には1ページで完結しているので、入門書として非常に読みやすいと思います。
- 津上英輔『美学の練習』春秋社、2022年
「美」と「芸術」「アート」といった言葉から始まる、美学の考え方の方針を学べる最も基本的な教科書だと思います。
- 美学会編『美学の事典』丸善出版、2020年
美学や芸術学が射程に置く多様なトピックについて、最新の研究を完結にまとめた非常に充実した事典です。高額ですが、図書館や研究室でも読むことができます。
- 小田部胤久『西洋美学史』東京大学出版会、2009年
古代はプラトンから近現代はハイデガーやダントーに至るまでの様々な哲学者・思想家の美と芸術にまつわる言及を丁寧に汲み取り、特徴的な形式でまとめ上げた美学史の体系といえるテキストです。
- 小田部胤久『美学』東京大学出版会、2009年
カントの『判断力批判』は美学において極めて重要なテキストです。『美学』では、『判断力批判』の内容を丁寧に噛み砕きつつ、各部分の主張に対するカント以外の思想家の応答と照らし合わせて検討する本です。小田部先生の非常に丁寧かつ壮大な仕事の結実です。
- 三浦俊彦『改訂版 可能世界の哲学 「存在」と「自己」を考える』二見文庫、2017年
三浦先生は英米系の哲学に精通しており、可能世界論は美学においては文学や映画などにおけるフィクションを論じる上でも重要とされています。この本では論理式も登場し、カントなどの大陸哲学の文体とはかなり異なる分析哲学の進行にふれることができるかと思います。
- 吉田寛『〈音楽の国ドイツ〉の系譜学』青弓社、1・2巻は2013年、3巻は2015年
2019年度から着任された吉田先生の著書です。ウィーン古典派などのいわゆる「ドイツ音楽」がいかに定義され、ドイツ国民国家の形成をいかにして支えたのかを、歴史的に分析しながら、流れをもった思想史として語ることを試みた本です。西洋音楽を研究したいと考えている人にとっては必読の書と言っても過言ではありません。

終わりに

最後まで読んでいただきありがとうございました。

これで少しは美学芸術学研究室の魅力を伝えることは出来たでしょうか。

わからないこと、もっと知りたいことがあれば、どうぞ気軽にお尋ねください。

研究室の公式 Web サイト(<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/bigaku/>)もあわせてご覧ください。

しかし、「百聞は一見に如かず」です。一番いいのは直接研究室に足を運んでみることです。

優しい先輩たちがいつでも歓迎します。場

所は、法文二号館(のアーケードより道路側、赤門により近い部分)の2階です。

一番迷わないルートは、総合図書館の真向かいにある地味な入り口から入って、

階段を上がって左折するルートです。

そうすれば、「美学芸術学研究室」の看板が出迎えてくれるはずです。

平日は10時頃から開いていますので、どうぞお気軽にお越しください。

美学芸術学研究室 一同